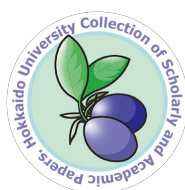




|                  |                                                                                                            |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | ロングトレイルと滞在交流型観光：体制づくりの現状と課題                                                                                |
| Author(s)        | 木村, 宏                                                                                                      |
| Relation         | 歩く滞在交流型観光の新展開<br>The New Development through Extended Stay and Interactions with Locals in Walking Tourism |
| Citation         | CATS 叢書, 12, 17-30                                                                                         |
| Issue Date       | 2019-03-31                                                                                                 |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/73763">https://hdl.handle.net/2115/73763</a>                          |
| Type             | departmental bulletin paper                                                                                |
| File Information | CATS12_6.pdf                                                                                               |



## ロングトレイルと滞在交流型観光

### ―体制づくりの現状と課題―

木村 宏

北海道大学観光学高等研究センター特任教授

あらためてよろしくおねがいします。去年から観光学高等研究センターにお世話になりまして、2 年目でございます。西山先生から「今回のテーマは歩く旅でいこう！」ということで、今回ご登壇いただく皆さんに、私と下休場先生でお声をかけて、歩く旅の議論なので楽しい研究会ができればいいなと思っています。特に韓国や九州、本当に遠くから、中には歩いて 1 分で来れる方もいますが、大勢の方にお越しいただいたので、2 日間よろしくお願いいたします。

私の時間は、研究発表もありますが、お越しいただいた皆さんがどういう背景を持って、歩く旅にどのように関わっていらっしゃるかというところを紹介しながら歩く観光に関することを半分くらいお話して、後半は、私がフィールドとして関わって三陸の震災復興の国立公園の中に整備中の「みちのく潮風トレイル」というロングトレイルコースのことを発表させていただきます。関わり始めて 6 年たっています。あと 2 年ほどで全線開通となるのですが、そのあたりを現場に入りながらの考察として発表させていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それではスタートします。「ロングトレイルと滞在交流型観光～体制づくりの現状と課題～」ということでお話をしたいと思います。まず「札幌 1 泊が大半」という新聞記事を御覧ください。北海道人は半期で 1,100 万人以上の訪日外国人が訪れており、この 5 年間右肩上がりである中、ほぼ札幌には 1 泊しかないという報道記事です。後半これについてお話しできればと思っていますが、まずは問題提起です。

まず、歩く観光の変遷ということで、下休場先生からもお話がありましたが、歩く観光を大きく 3 つの時代にわけてみると、まずは人が 2 足歩行を始めて生活の手段として歩いていた時代、それから産業革命、日本でもいわゆる高度成長が始まる時期の前あたりの労働と余暇活動、レクリエーションの創成期、それから近年。余暇活動、ライフスタイルとしての歩くという行為が盛んになった、オルレやトレッキング、ウォーキングをはじめとして歩くことを普及する協会などの誕生する近年ということなるのではないのでしょうか。

近年の日本においては、奈良・平安時代あたりの信仰の行事としての巡礼や参拝から始まり、鎌倉時代から桃山時代にかけては街道などの交通網が整備される中で、長い道のりを歩くとか、商業旅というのがこの辺りから出てくると。さらに江戸時代に入りますと、

鎖国にはなりますが、一般庶民が歩く旅行を始めるという時代に。名所案内のような、今でいう旅行パンフ、旅行雑誌という類が出始める、いわゆる旅行行動の創成期ではないかと思いますし、お伊勢参りが全盛期になるという時期がこの江戸時代。明治以降まさに高度成長期に入りまして、保養のためのハイキングですとか、東京オリンピックを境に、歩け歩けの運動の中からウォーキング協会が発足したりします。近代に入って、リゾート法が施行され、保養地やリゾート地に出かけトレッキングをする、ハイキングをするとか歩くことが余暇活動として定着してきました。

歩くことへの興味の背景として、年間の労働時間が青い棒グラフでわかるようにどんどん減っていく中、生活の力点を何におくかというアンケートです。かつては貯蓄というのも多かったのですが、今は余暇活動に使いますという答えが一番です。では余暇活動で何をしますかという具体的な質問をしますと、2015、2016年とウォーキングがベスト10に入ってきます。余暇活動の一番は国内旅行で、2015年と16年で変わらないのですが、5,500万人くらいの方が1年間で国内旅行に出かけるというデータですが、国内旅行に匹敵するくらいの方がウォーキングをしている。3,000万人くらいですね。さらにあなたたちは普段どんなスポーツをしていますかというアンケートを取りますと、全体で一番多いのは、30%の人が歩いてますという答えを出しています。これを裏付けるかのようにスポーツ用品業界の売り上げの推移を見ていきますと、右肩上がりですね。5,200億円規模といわれるスポーツ用品の業界の大きさからすると、1,100億円が主にランニング、トレッキング、あと最近流行りのアウトドア関連商品の消費額になっています。スポーツ用品業界では、この分野が下支えをしていると言っていいでしょう。

アウトドアーズ、アウトドアライフ、アウトドアライフスタイル、アウトドアテキスタイルなんていう言葉も出てきていまして、ちょっとしたアウトドアブームではなかなと思います。皆さんがスポーツ用品店に行って、まず店頭で目にするのは何だと思いますか。ちょっと前の時代であれば、今の時期ならスキー用品一色だったと思いますが、今は通年を通して歩くギア、歩くための商品が並んでいると思います。アウトドアグッズが多く並んでいるところから見ても、これらがスポーツ用品の中ではかなり主流なのだと考えられます。

歩くことの効果について検証してみますと、これはウォーキング協会が発表しているものですが、歩くことで身体的効果、精神的効果、医療費削減の効果が得られるとしています。書店の歩くコーナーに行くと、「ウォーキングのすすめ」、「トレッキング入門」のに加えて「歩く与健康にいい」「歩けば脳が活性化する」など、歩くことの効果を伝える本が多くなってきました。書店の顔が見えてくるかと思います。これは「ウォークス」という本ですが、歩くことは何なのかということを考えさせる本として、最近出版されました。

こういう背景に並んで、さらに歩くことが観光につながる過程の分類として、私が勝手に分類したので果たして正しいかどうか分かりませんが、その起源を、英国型、聖地巡礼型、アメリカ型と分けてみました。

英国発祥の歩く文化の起源は、健康増進のために産業革命前後、労働者が歩く権利を主張し、それがフットパスにつながった例としてということで、こちらについては塩路先生が明日詳しく解説されると思われますので、具体的には話しませんが、いわゆるキンダースカウト事件とも呼ばれるようですが、労働者たちの歩くことの要求、この運動がランブラーズ協会設立やイギリスの国立公園を設置するきっかけになり、いわゆる歩く権利の保証がこの事件をきっかけにおこるというものです。これもランブラーズが発表しているものなのですが、推進団体がいくつかありまして、明日の塩路先生の発表とも数字がちよっと違うかもしれませんが、総延長 14 万 km というフットパスがありまして、うちロングトレイルという分類に入るのが 3,000km 前後、50 万人の方々がフットパスを楽しんでおり、消費額としましては 1 兆円を超えるとされています。

西山先生もお話しされていましたが、これは、小川さんに提供いただいたイギリスのフットパスの 50 コースのマップです。イギリスにはそれぞれの町の中にフットパスのコースが楽しめる仕組みができていますが、例えば、これですね、町の中にトレッキングを楽しめるような工夫や仕組みがかなりきちんとできていますね。情報を提供するショップがあったり、左上のような案内板が町の中にあつたりと、または地図が売られていたりするわけですが、歩くことがまさにライフスタイルになっているというイギリスの事例は、明日の発表を楽しみにしたいと思います。

これは神谷さんの取り組みです。東京都町田市周辺の里山をフィールドとしてフットパスコースを作っています。私も 5 年くらい前、一緒に歩かせていただいたのですが、東京とは思えないような楽しい里山を歩けるコースがあり、地域の方がもてなしをするその仕事やお客さんが来ることを楽しみにしている姿が非常に印象的で、この日本版フットパス、いろいろご苦労されたということでその辺りは明日伺えればと思いますが、こういった広がりも見えてきています。

これは小川さんが展開されている北海道のフットパスのネットワークです。数えただけで 50 くらいあるのですが、北海道でそれぞれの町でフットパスを作り、それをネットワーク化しているというようにお話も明日お話を聞きたいと思います。

もう一つの分類は、修業や修験の道を歩く聖地巡礼型。これは明日、岡本先生や多田さんが解説して下さると思います。それから、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路を歩かれて、これに共鳴を受けて、韓国でもこういったことを導入できないかと推進をしてきた張本人でいらっしゃいます、オルレの推進者であられる、安（アン）さん、李（イ）さんが、いらっしゃっていますが、今日これからお話を伺えるのを楽しみにしています。オルレのベースになっている考え方が聖地巡礼であります。こういった聖地巡礼がロングトレイルとして、または巡礼の道として楽しまれています。世界遺産に登録されたことをきっかけに日本の熊野古道がこのサンティアゴ・デ・コンポステーラの道と姉妹道として連携しています。関係者が行き来したり、お互いに推奨しあつたりしているのですが、明日その仕掛け人にお越しいただきます。熊野ツーリストビューローの多

田さんは、熊野古道が世界遺産になったことで、その活用と維持管理の体制づくりのため、観光推進組織として熊野古道 DMO 作られた方です。紀伊田辺に本拠を持っていて、サンティアゴ・デ・コンポステーラとの姉妹道のきっかけや、熊野の話も楽しみにしていただけだと思います。

これは岡本先生がお話しされますが、四国のお遍路道。八十八か所、ピンポイントで巡る方もいらっしゃるようですし、ぐるっと回る方もいらっしゃるようです。安（アン）さん、李（イ）さんがやっていたら、済州島オルレとスケールは違いますが似ていませんか。このオルレは済州島を 26 区間に区切り、ぐるり一周するトレイルですが、400km を超えておりロングトレイルコースと呼んでいいと思います。

長い道のりを歩くということは、「滞在する」とか「移動を楽しむ」という概念が当てはまるのではないのでしょうか。今日はスイスから山田桂一郎さんも参加くださっていますので、スイスモビリティの話をして少しします。スイスモビリティというのは、動力を使わない移動手段を楽しんでスイス国内を回ってもらうという提案であり国策です。スイスに滞在してもらいたい、環境負荷がかからない優しいスイスを楽しんでももらいたいという活動です。スイスのロードマップにハイキングコースを重ねてみると、スイス全土をハイキングできるといっても過言ではないかもしれません。さらにサイクリングロードを追加し、マウンテンバイクで楽しめるコースを追加すると、スイス全土が動力を使わずに移動し楽しめることがわかります。さらにスケーティング、いわゆるローラースケートで回れるコースがあり、最後はカヌーイング、要は川を下るということで、これを足すと、スイスに何泊しなければならぬかと思いますが、歩く滞在型観光地創造のヒントとしてスイスモビリティは有用なんじゃないかと考えているところです。

話を戻しますと、もう一つのロングトレイル、アメリカ型。いろいろな時代背景がありますが、自然保護の父とも言われるジョン・ミューアの想い、自然保護の想いを一本の道にし、歩き、観察し自然と人との共生を考える道、まさにジョン・ミューア・トレイルが起源といわれています。

アメリカ 3 大ロングトレイルというのがあります。ジョン・ミューアトレイルの精神を受け継ぐ超ロングトレイルです。アメリカ大陸を縦断する 4,000km オーバーのトレイルは、歩くことの醍醐味や達成感を感じることのできる世界の誇るトレイルです。

また、国内におけるロングトレイルの兆しについての話ですが、昨春秋、ツーリズム EXPO ジャパンという、ここにいる多くの先生がたが参加されたと思いますが、日本の観光のプロモーションの最大級のイベントです。国内の関係者はもとより、各国の観光に関係する大臣級の方が招かれて開会式が行われるのですが、この開会式の式場で、昨年度日本国内で観光事業の取り組みの優良事例が発表され、その表彰式が行われます。去年の表彰式では、南三陸「ホテル観洋」が一番に表彰されました。三陸復興をホテルとして自分たちも被災したけれど、その遺構を伝えていくということ、地域の皆さんを応援していくという姿勢が評価され最優秀賞を取ったのですが、部門賞の中に「信越トレイル、トレッキング

による訪日外国人向け里山自然・文化体験」が優秀賞の一つとして表彰されたのです。信越トレイルのスタート地点から関わってきた 1 人の者として非常に嬉しく、誇りに思っているのですが、それを今日は伝えたいのではなく、各国の大臣級の方たちがいらっしゃる表彰式の中で、日本にロングトレイルがあるよ、歩く観光をコンテンツとして滞在型プログラムがあるよと伝えられた、記念すべき日じゃないかと感慨にふけているのです。「歩く観光」が日本国内でもしっかりと位置づけられたことにほかなりません。

そもそも歩く文化を持っている、なぜロングトレイルなのかということですが、百名山ブームがあったり、アウトドアのブーム、地域活性化の手法として、地域連携の枠組みとして、さらに地域資源の発掘、利用保全といったところでも、今ロングトレイルが注目されているのではないかと考えています。

加藤則芳という人物についてものちほどお話ししたいと思いますが、雑誌でロングトレイルが流行るぞと報道され、各アウトドア誌がロングトレイルを取り上げ、ロングトレイルを普及するための協会も立ち上がる、そして入門書もできました。ロングトレイルを楽しむ人たちの関心は海外にも向いています。海外のトレイルを紹介した WEB サイト。これは私が関わる日本ロングトレイル協会に属しているトレッキングルートですが、これ以外にもたくさんあるのではないかと考えています。

最近のロングトレイルの起源というのは、ここにあるのではないかと考えています。東海自然歩道。環境省の岡野さんもいらしているので、力を入れて話したいと思いますが、環境庁の時代に敷設が始まり、日本の国立公園を紹介する手段として、自然歩道ができました。最初にできたのが、1969 年の 700km に及ぶ東海自然歩道です。2 番目にできたのが、いくつかあるのですが、そのうちのひとつに九州自然歩道があります。実はどちらも管理がなかなかうまくいかなくて、道が途絶えてしまっています。発想は良かったのですが、維持管理ができずに朽ちてしまったところもあるのです。実は九州ではこれは問題だと提起し、元通りにしようと旗を振っているのが、ここにいる志賀さんです。自然歩道を復元していこうという取り組みですね。このあとお話をいただきます。

九州自然歩道は、北九州市の皿倉山がスタート地点になっていて、ここに碑が建っています。ここに書いてある「自然歩道の効用は体力を作ること、もう一つは自然に親しむことである。将来自然歩道で競技が行われることになれば大変不幸なことだが、そのときは躊躇なく自分は一番遅かった人に賞を与える。長距離自然歩道推進者 ベントン・マッケイ」とあります。実はこの人、アメリカの三大トレイルの一つ、アパラチアン・トレイルを考案、構想した人です。もともとは建築家としてアパラチア山脈周辺の地域計画をたてるなかで地域をつなぐロングトレイルの発想をしたのです。スライドの絵は当時ベントン・マッケイが構想したアパラチアン・トレイルです。アパラチアン・トレイルが開設されて間もなく 1 世紀を迎えようとしています。その想いを加藤則芳という人物が引き継ぎ、日本にロングトレイルを紹介します。彼は先に述べたジョン・ミューアについての研究や自然保護のあり方に興味を持ち自らも研究、その成果や日本の国立公園のあり方について



の提案も著作に残しています。日本にロングトレイル文化を根付提言もかせたいと願った人物です。5年前にALSで亡くなってしまうのですが、自ら世界のトレイルを歩き、そして日本国内の野山を歩き、日本のロングトレイルの普及に尽力をした人物です。

ここまで足早に話をしてきましたが、私が思うロングトレイルの成立要件、セオリーといったところですが、熱意があれば何とかできる。ところが、地域をあげて取り組む姿勢、連携がどうしても必要である。更にそれを守り引き継ぐ精神が必要であるということ。これに先ほどの環境省の話ではありませんが、整備が肝心であるということ。満足度を上げるためにも整備をしなくてはならない。きちんとしたほうがいいのではないかと。その仕組み、運営体制が肝要であるということです。

後半は、私の取り組む「みちのく潮風トレイル」の話をしたいと思います。前半は歩く観光を概観し、日本のロングトレイル普及のお話をしましたが、フィールド実践として関わるトレイルみちのく潮風トレイル」です。7年目になります。2011年に東北で大地震が起きました。環境省は、三陸復興国立公園の創設を核とした「グリーン復興プロジェクト」を翌年に打ち出します。復興プログラムには、このような理念、方針、具体的な取り組みがあります。(スライド)被災地域の沿岸にはかつていくつかの国立公園がありましたが、それをまとめ復興国立公園として、いわゆるナショナルパークとしての新たな枠組みを作り取り組みを始めます。当初「東北海岸トレイル」といったロングトレイルは、実は先ほどお話した加藤則芳さんが震災の起きる前の年に環境省に提言しています。三陸のリアス式海岸こそが日本を代表するトレッキングコースの一つになり得る、新たな国立公園の目玉にしてはどうか。そして、偶然にも翌年に震災が起き、その復興の核にトレッキングルートを据えようとなつてできあがったのが、公称で選ばれた「みちのく潮風トレイル」です。

青森県の八戸の種差海岸から福島県の相馬市までの当時700kmといていたのですが、整備していくうちにどんどん距離が増えて今では900kmといています。もしかすると開通したら1,000kmになっているかもしれません。路線を決めていくとどんどん距離が長くなっているのが現状でして、最終的に何kmになるかちょっと楽しみです、今のところ環境省は900kmと言っています。

風光明媚な景色を貫き、東北ならではの温かい心の交流ができたり、歩くことで震災の遺構を感じ、語り継ぐ、東北の暮らし、歴史、文化を知ってもらう、さらには東北の幸、海の幸を中心としたグルメを楽しんでいただくという趣向のトレッキングルートです。まさにナショナルトレイル、環境省が作り上げたトレッキングルートとしては、久しぶりの長距離自然歩道ではないでしょうか

開通は来年度の予定です。何をもって開通としているかというと、すべての区間で地図があること、今発行されている地図は21ですが、最終的には28くらいになるのではないかと思います。そして、各市町村の理解が得られること、管理体制が確立されていること。この3つが全線開通の要素としています。

アパラチアン・トレイルから続く哲学というか想いなのですが、地域の合意と地域をあげた機運の醸成が何より必要であるというところが、「みちのく潮風トレイル」の根底にあります。2011年から環境省が地域住民とのワークショップを続け、路線を設定しています。路線の設定については、既存の道を使うということとか、段階的に開通をしてく、また有事のときの避難路として使おうという方針が出ています。利用推進のための取り組みとして施設整備、スルーハイクができること、交通機関との連携、多様な主体による維持管理の体制を作るというところを目標として道づくりが始まっています。

タイムスケジュールとしては、当初 2016 年には全線開通している予定でしたが、ルート決定が難航している、地域のコンセンサスが取れないなどありまして、その年から抜本的にテコ入れを始めます。全部で 4 県 28 市町村なのですが、1 年目で 19 市町村をまわり、草の根的な状況把握と体制を構築する活動を進めていきます。ヒヤリングを実施したり、全線徒歩で調査したり、先進地を見てまわるということで九州自然歩道も見させていただきました。環境省の中も、いわゆるデスクに座っている方だけでなく、現場にいる保護官、レンジャーやアクティブレンジャーたちにも会議に参画していただいて、みんなで作っていくんだという姿勢を作り、少しずつ輪を広げながらこれを 3 年間続けました。市町村をまわり、さらに検討会議を開き、管理運営計画を作り、やればやるほど仕事が増えていきます。2 年目に市町村連絡会を発足させ、市町村レベルの横の連絡が取れるようになったあたりから、既存の環境省のビジターセンターが一定の地域の取りまとめ役になり、統括本部も必要だという議論になっていきます。

結果、トレイル運営のための体制図ができたのが 2017 年、統括本部がおかれそのサテライトと呼ばれるビジターセンターが地域のまとめ役となり、統括本部は環境省との調整を図りながら全体を俯瞰し運営するというスキームができました。実はこのスキームづくりもさることながら実際動かしていくことのほうが大変です。スムーズな運営を進めるための管理運営計画をまもなく作り終えます。分厚いマニュアルになると思います。

統括本部に決まった「みちのく潮風トレイル」のトレイルセンターが名取市に建設されることになり、昨日起工式でした。来年一年かけて、統括本部ができあがり、サテライトと呼ばれるビジターセンターと連携をとりながら、全体を管理運営していくということです。

統括本部は現在設計に基づいた様々な準備が始まっています。内装やそのデザイン、サイン表示などは現在乃村工芸社さんとタッグを組んで準備しています。一年後にはその結果もです。いい結果になりますよう、乃村工芸社さんよろしくおねがいしますね。

さて「みちのく潮風トレイルの体制づくりから見る現状と課題」ということで、ロングトレイルの体制づくりは推進の意志を公認の活動としていくのが第一段階。「これできないよね」「市町村超えるのムリだよ」というような、新たな発想への転換を誘導することはパワーが必要です。また資金、マンパワーをどう捻出するのか。それから推進母体、さらに新たな価値創造。その先に交流が生まれ、ようやく人があり兆しが見えてくる。



グリーン復興プロジェクトはこの5年で約100億円の資金が投入されています。人々の生命や財産を守るための事業費でありますけれど、トレイルの使命もまた有効なものにしていかなくてはなりません。これで失敗する訳にはいきませんし、これを末代にまで伝えていかなければならない。さらにナショナルトレイルということですので海外の人にも伝えていかなければならない。こんな使命を持っているのが「みちのく潮風トレイル」です。

さて、私の話をまとめてみます。日本は人口減少が続いている。余暇活動の需要は増えてきている。観光地、地方創生の柱に観光がすえられている。一方では観光地の生き残りが取りざたされていて、そのために消費単価をアップし、滞在時間の延長を伸ばすことが必要だと言われている。そのために滞在プログラムの開発が必要であり、そこに歩く観光が脚光を浴びる時が来たのではないかと。日本人は、歩くことに興味や広がりを見せているのではないかと。また、これからインバウンドは見逃せない。特に歩く文化を持った欧米からの観光客がロングステイをし、日本の野山を、町並みを、歩くということを要望し始める。さらにロングトレイルが普及するためには滞在に耐えうる観光地づくりが必要ではないでしょうか。そこで登壇いただくのが高山さんです。滞在プログラムとしての歩くプログラム、これを九州で展開されているのが高山さんで、佐世保の時旅、久留米の町あるき、柳川のゆるり旅などを仕掛けてきた方ですので、明日話を聞きたいと思いますけれども、こうした滞在型プログラムも必要となってくるだろうと思います。

ロングトレイルを軸とした、横断的で広範囲に渡るプログラムの展開には、ワンストップで情報提供や管理体制を行う主体が必要です。今回のシンポジウムではこの点もぜひ皆さんに考えていただきたいと思います。

最後に、札幌1泊が大半ということを冒頭で申し上げましたが、実は広島と京都、同じ政令指定都市ですけれども、広島は「広島湾岸トレイル」、京都には京都一周トレイルが、都市部をぐるり囲むように開設されています。広島と京都に滞在しながら歩く人が結構増えているのです。この例を参考に、札幌もぐるりと回れるトレッキングルートができれば、外国人の平均宿泊数が1泊から2泊、3泊になるのではないかなと考えています。フットパスの小川さん、身近な地域のトレッキングの普及とともに汗を流していきましょう。というのが今日の私の結びの言葉です。どうもありがとうございました。



## ロングトレイルと滞在交流型観光

— 体制づくりの現状と課題 —



北海道大学 観光学高等研究センター  
木村 宏



### 歩くことの効果

#### 身体的効果

- ・冷え性克服
- ・血中コレステロールの改善による心臓機能強化
- ・カルシウムへの刺激や日光に当たることによるビタミンDのカルシウム吸収効果による骨の強化
- ・有酸素運動による脂肪燃焼効果から肥満の解消
- ・新陳代謝、血液の好循環、皮膚の分泌により美肌に
- ・ミルキングアクション（筋肉収縮の繰り返し）による美脚効果
- ・有酸素運動による動脈硬化の解消
- ・歩くほどにGOT, GPT値が下がり肝機能改善
- ・インシュリンの働きが活性化し、糖尿病改善

#### 精神的効果

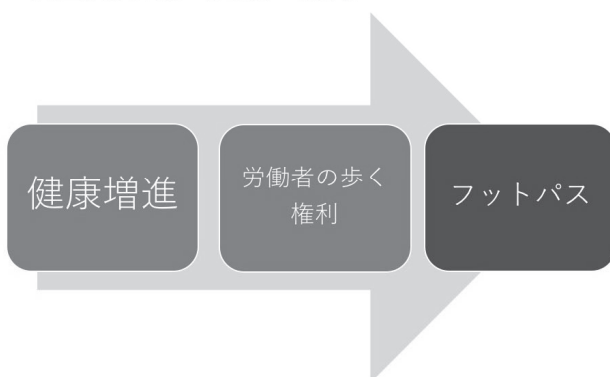
- ・脳の活性化
- ・ベータエンドルフィンに寄る幸福感・爽快感
- ・ドーパミン効果によるやる気の喚起
- ・セロトニン効果でリラックス
- ・有酸素運動効果で気分転換

#### 医療費削減効果

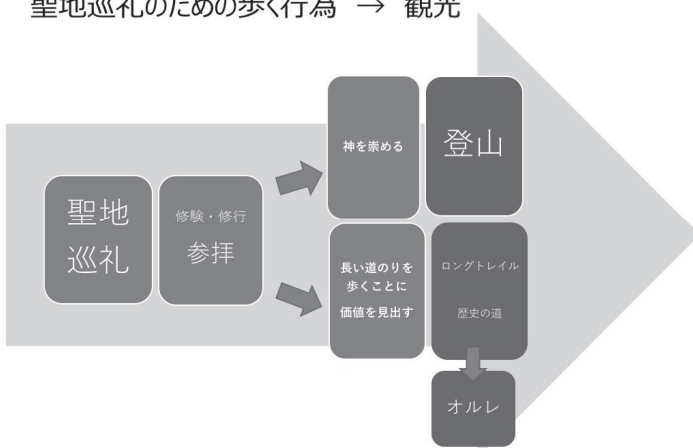
- ・免疫力の向上
- ・脳年齢を若くし病気予防

出典：日本ウォーキング協会 ウォーキング指導テキスト

英国発祥の歩く文化→観光



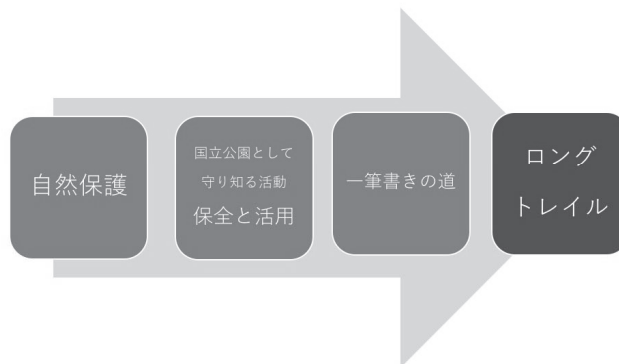
聖地巡礼のための歩く行為 → 観光





歩く観光への発展3分類

## 米国発祥の歩く文化→観光



アパラチアン・トレイル構想



1934年に創設開始、1937年全線開通



ベントン・マッケイ (1879~1975)

原生山岳地帯を測量して地図に起こし、トレイルラインを区切るとよいだろう。高地を走るメイントレイルを低地からの進入み路となる“アプローチ・トレイル”と連携し、必要な枝道を確保するのだ。出発点はふもとの集落に配したい。この地本来の環境の 半分はこの村々にあるのだから。

Outdoor Culture, The Philosophy of Through Trails (1927)

ニューイングランドからジョージアへ続くアパラチア山脈に沿ってレクリエーションを備えたコミュニティを配し、ウォーキング用トレイルで結ぶプロジェクト。アウトドアと結び付いたコミュニティをより広範囲かつ体系的に開発するための基盤を築くことを目的とする。いわば住宅供給とコミュニティ建築のプロジェクトだ。

An Appalachian Trail: A Project in Regional Planning

出典：鳥取県/www.pref.tottori.lg.jp/secure/1054472/ja\_Trails\_Cultural\_Heritage\_and\_Nature\_1.pdf

## なぜ、いまロングトレイルなのか

そもそも歩く文化を持っている 巡礼やお遍路

百名山登頂ブームの世代の高齢化

ふるさと回帰趣向・自然回帰趣向

ブームの仕掛け

アウトドア・アパレル、マスコミの影響

地域の活性化(観光)の手法としての活用

地域連携の新たな枠組み

地域資源の発掘・利用・保全

ジョン・ミューア、加藤則芳



## 加藤則芳 かとう のりよし

1949年、埼玉県生まれ。作家としては国内外の自然保護やアウトドア、ロングトレイルなどをテーマに執筆。

2005年にアメリカの全長3500キロにおよぶアパラチアン・トレイルを踏破し、トレイルと自然、文化、地域、政治、人などのかかわり、そのシステムのあり方を探り出すことを、ここ数年のテーマに掲げている。

著書に紀行文学大賞受賞作『ジョン・ミューア・トレイルを行く』（平凡社）、『自然の歩き方50』『日本の国立公園』『森の暮らし、森からの旅』（いずれも平凡社）、『森の聖者―自然保護の父ジョン・ミューア』（山と溪谷社）など、訳書に『おいしいちゃんと森へ』（平凡社）がある。

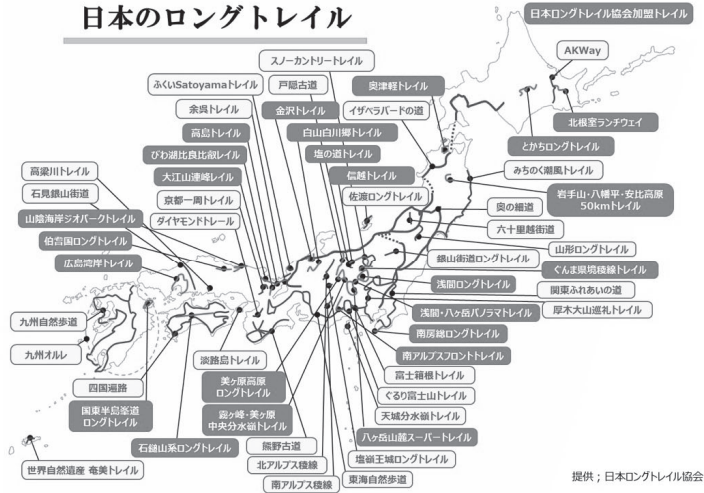
2009年に筋萎縮性側索硬化症（ALS）を発症。闘病生活にありながらも、最後まで口述筆記などによる執筆活動を精力的に続けていた。2013年4月17日逝去。

写真提供：筆者





## 日本のロングトレイル



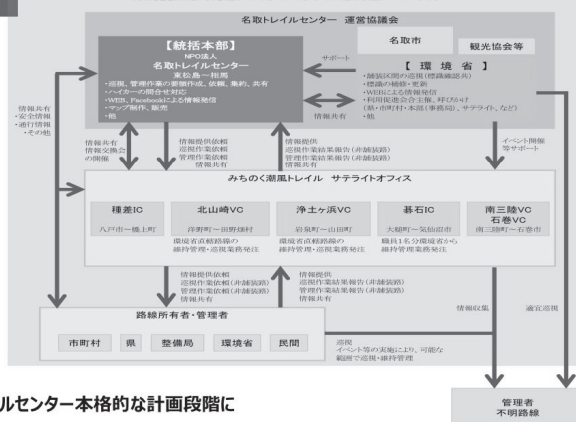
提供：日本ロングトレイル協会

## みちのく潮風トレイル管理運営体制の構築

平成28(2016)年

みちのく潮風トレイル 利用促進連絡会(主催：環境省／事務局：統括本部)  
利用促進連絡会の実施(全体：年1回、ブロック毎：年1回～全20回開催/1クール年6回)

管理運営体制図



名取市のトレイルセンター本格的な計画段階に

## 「ターゲットからみたロングトレイルの可能性」

★ 日本人ハイカー ★

レジャー趣向は高まるが、人口減に追いつかない

歩くことへの興味は広がりを見せている

★ 更に伸びる訪日外国人 ★

歩く文化を持った欧米人の旅行の興味が日本へ  
( ドイツ14.1泊 フランス13.8泊 イタリア12泊 )

農泊など日本の生活文化が残る地方でのロングステイが現実化

日本人に拡散する可能性も否定できない

歩く文化・楽しみを求める層の拡大

「ロングトレイル」の需要拡大の可能性は大きいのでは…

ロングトレイルを軸とした（広域的な）滞在交流型観光の創造のために

## 課題

繋がる道（ロングトレイル）の整備  
歩く楽しさに対する住民意識の醸成

## ワンストップ窓口（推進母体）の必要性

快適な滞在空間の演出

管理システムの確率

ガイドの養成・稼働

整備の仕組みづくり